デーリー東北新聞社提供

デーリー東北
2023年（令和5年）4月18日（火曜日）（19）

私見創見 Tuesday

地元の意識が伝統支える

手仕事のまちを取り巻く風土

川守田礼子
八戸工業大感性デザイン学部准教授

かわもりた・れいこ
1967年、旧福地村生まれ。東北大文学部卒。八戸工大二高を経て、2001年より八戸工業大で勤務。人形浄瑠璃文楽などの伝統芸能や染織に関わる伝統文化、特に南部菱刺しが研究テーマ。第3回インテリジェント・コスモス東北文化奨励賞を受賞。文楽はちのへ塾主宰。

「南部地方の伝統工芸品「南部菱刺し」の復興に寄与した人物に、八戸市の民俗学者の小井川潤次郎（1888－1974年）がいる。小学校教員であった小井川は、柳田國男の民俗学の影響を受け、八戸郷土研究会を創設し、郷土民俗学に関する研究を行った。「モンペ先生」という愛称をご存じの教え子が多くいらっしゃると思う。

小井川は地域の生活文化を観察する過程で、着物のツギあてやツヅレ刺しに着目し、それを契機に菱刺しの収集や製作を大正期から始めている。文献によると、当時はまだ南部地方で麻作りや麻織りが行われており、大正期初めは色毛糸を用いたカラフルな前垂れが流行した時期である。南部菱刺しはまだ地域に残っていたものの、急速に木綿や他の衣料に変換されつつあった。その状況を見ていた小井川は、大正期末には勤務先の小学校教員に声をかけ、伝統技術の習得や製作などの復興活動を開始している。

本格的な活動に入ったのは1932（昭和7）年。民藝運動の機関誌「工藝」第14号、こぎん刺し・南部菱刺し特集号に、小井川の南部菱刺しの解説文が掲載されたのが全国に出た菱刺し文献の先駆けとのこと。その半年後には、一般向け講習会「菱刺手ほどきの会」を開催し、技術継承と後進教育を進めた。

講習会に先立ち、当時の地元新聞に寄稿した「工藝展覧會を開くについて」という文章の中で、小井川は一連の活動の意図を示している。13（大正2）年の大凶作、31（昭和6）年の冷害による大凶作は、この地域に深刻な被害をもたらした。凶作・不況で困窮する農村地域の副業として、地域に伝承される伝統的手仕事を活用できないかと考えたようだ。

また、この文章の中で、南部地方の菱刺し、裂織、久慈焼など、手の工芸の伝統が途絶えそうな状態にあると指摘し、「今にしてこれに息を吹きかけて置かねば再び起つ時期を失いそうだ」と危機感を述べている。小井川は、こうした伝統的手仕事を、地域の産物として地元の産業振興にどのように生かしたらよいか考えるようになった。

しかし、このような伝統的手仕事を取り巻く当時の状況や地元の人たちの意識について、「私たちの持っているものの、美しさも、良さも解らないようであった」と述べ、地元の人が「土地の物」に目を向けない、関心を寄せない状況を憂えている。「土地の物」の美しさや良さは、むしろ他所の人や旅で訪れる人の方が高く評価する傾向を指摘している。

このような地元の意識は、令和の時代に果たして変わっただろうか？伝統的手仕事は、ここに生きていた人たちの生活と共に育まれてきたものである。「土地の物」をよく観る目、その歴史をいとおしく想う心、現代と地続きに捉える感性など、手仕事を支える地元の意識がなくては「手仕事のまち　はちのへ」の未来は貧しいものとなるのではないだろうか。

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。